

私があのにたみ易い目をして、どんなに母の容貌を描いてそれと語ることと空想することを楽しみにしていたか！ 私は人のない庭や町中で、小声で母の名を呼ぶことさえあった。しかも永久に会うことのできない母の名を――。

私は「そうだ。人間は決して二人の母を持つ理由はない。」と考えていた。そんなとき、現在の母を忌々しく冷たく憎んだ。私は一方には済まないと思いながら、それらの思念に領されるとき、私は理由なく母に冷たい瞳を交したのであった。

「姉さん。僕の母は――。」

と私は時々言ったものだ。姉は思いやりの深い目で、そんなとき、いつもするように私を優しく抱きながら、

「どこかで仕合わせになっていらっしやいますよ。そんなことをこれから言わないで頂戴。」

と言ってくれた。

「どこなんだ。」

と、私はすぐに烈しく昂奮した。何者にもたえがたい激怒は、母のことになると最も信頼している姉にまで及んだ。

「そんなこわい顔をしては厭。」

「僕の顔はコワいんだ。」

と、私は姉から離れた。こんなときは、姉でも私の心を知ってくれないように、生ぬるい感じのもとに怒りをかんだ。もう姉さんなんぞはいても居なくても、また、愛してくれても呉れなくてもいいときえ思っていた。世界じゅうが私を不幸にするように思って、私はますます深く怒るのであった。

「姉さんに僕の心がわかるものか。」

と、私はすぐ表へ駆け出すのであった。たった一人の友であるものから離れて、ひとり裏町や空地などを歩いていった私には、木やそのみどりも人家も別なものに思われた。何もかも冷たく悲しかった。

そんなときは、何にも言わない白が尾^っいて来た。そして彼がみな解っているような悲しい顔をしていた。――私は母とあの広い庭へ出て茶摘みをしたり、庭で父と三人でお菓子^こをたべたりしたことが思い出された。初夏の風はいつも若葉の匂いをまぜて吹いていた。私は小さな顔をかしげるようにして、父と母の顔を半分ずつに眺めていた。隔たりのない総ての親密さが私達親子の上にあった。そんなとき、シロも傍の草のなかにねむっていた。

「お前はいつたい成人して何になるか。」

と父はよく笑顔でたずねた。

私はだまってにこにこしていた。

「さあ、この子は考えることが上手だからきつと先生にでもなるかもしれない。――ね。

お前そう思わないかい。」

と母は言った。

「僕なにになるか分らないんだ。何かこう偉い人になりたいなあ。」

と私は本当に何になっていいか分らなかった。

「そうだ。ともかくも偉い人間になれ。その心掛けが一番いいんだ。」

「そうね。それがいい。」

と母も言った。

私も目的のない漠然とした意志のもとに、ともかくも「偉い人」になりたいと思っていた。しかし軍人のきらいだった私は、それ以外に偉い人になりたいと思っていた。

「さあ。もうすこしで摘んでしまえるんだから、やってみよう。」

「ええ。」

こうして父と母とは茶畠の中へ、あの美しい芳しい若芽をつみに行った。私はひとりで

木の蔭にシロとふざけていた――。